

〈蚕〉を表す語彙—造語法と方言分布—

新井 小枝子

Words for “Silkworm” in Japanese Dialects: The Formation and Distribution

Saeko ARAI

要 旨

本稿は、日本語方言にみられる〈蚕〉を表す語の造語法と、方言分布について論じたものである。主な考察の対象は、東北大学方言研究センター「消えゆく日本語方言の記録調査」資料(2001年度調査)である。日本全国の1952年以前生まれの話者からえられた語彙である。

各地域で用いられている語を、コの有無、敬意の造語成分の有無に注目して統合し、造語にみられる発想法について考察した。〈蚕〉は、長い歴史の中で敬意の対象としてあつかわれてきたということが反映されているとした。明らかとなった造語成分にしたがって、統合した語形に記号を与えて方言分布地図を作成した。その結果、上代の文献にみられる1音節語コを基にして、各地域でさまざまな語形を造語していることがわかった。敬意の造語成分をもつ語形は、東日本で多様であることが明らかになった。『物類称呼』以降の、全国の方言における〈蚕〉を表す語について記録された資料を用い、経年比較を行った。

Summary

The paper discusses the formation and distribution of words for “silkworm” in Japanese dialects. The study is based mainly on the materials from “A Survey of Disappearing Japanese Dialects” (2001) by the Center for the Study of Dialectology, Tohoku University, which consists of vocabulary from nationwide speakers born in and before 1952.

The study classifies the word forms by the presence and absence of “ko” and by the elements representing respect and examines the semantic structures of these forms. The analysis shows that silkworms have been treated with great respect over a long period of history. A map of

dialectal distribution is created with signs given to the classified word forms. The map shows that the monosyllable word “ko”, which appears in the ancient literature, combines with other elements to form various word forms. It also shows that words with the elements representing respect show a wider variation in Eastern Japan than in other areas. In addition, the paper has the result of a longitudinal study of the words for “silkworm”, which is based on the nationwide materials going back to Butsuruishoko (a dialect dictionary in the Tokugawa period).

はじめに

日本の伝統的な生業である養蚕は、〈蚕〉という昆虫を飼育すること、すなわち、人がその昆虫の〈幼虫〉の時期に関与して繭を生産することによって成り立つ。長い年月をかけ、人の手によって家畜化されてきたこの昆虫は、日本全国で飼育されさまざまな名によって呼ばれてきた。〈幼虫〉の最終段階になると口から糸を吐き、白くて丸い繭の中に引きこもるその神秘性から、『万葉集』の時代より歌に詠まれることも多く、韻文、散文を問わず多くの文学作品の中に描かれてきた。例えば、鴨長明『方丈記』には、次のような部分がある。

- (1) こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べる事あり。いはゞ、旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭を営むがごとし。これを中比すみかの栖すみかにならぶれば、また百分が一に及ばず。とかくいふほどに、齡は歳々にたかく、栖すみかは折々にせばし。その家のありさま、よのつねにも似ず。広さはわづかに方丈、高さは七尺がうちなり。

年を重ね60歳を目前にひかえた長明が、晩年を暮らすための方丈ほうぢやう(約3メートル四方)の住処をつくる。それを「老いたる蠶の繭を営むがごとし」と表現する。自らの人生と住まいのあり方を、〈蚕〉が繭をつくる様子と重ね合わせて描いている。糸を吐き、それによってできあがる丸い繭の中に閉じこもってしまう〈蚕〉の生態、姿がよく観察されている表現である。時代は下り、近代文学、現代文学でも、〈蚕〉の飼育の様子や〈蚕〉の生態にもとづく比喻表現がみられる^(註1)。〈蚕〉を表す語は、もはや養蚕業という閉じられた世界だけのものではなく、作家と読者の間におかれて、両者に共有されるある世界観を描き出す語としてはたらいっている。

本稿では、その〈蚕〉を表す方言語彙、すなわち、日常生活の中で用いられている〈蚕〉への名づけを考察の対象とする。

I 研究の目的

東北大学方言研究センター「消えゆく日本語方言の記録調査」資料(2001年度調査)(以下、

東北大学方言研究センター資料)に基づいて、日本全国の〈蚕〉を表す語の造語法、および語形の多様性と方言分布を考察することを目的とする^(註2)。

東北大学方言研究センター資料の調査は、通信調査法によっている。具体的には、調査票を調査対象地域の教育委員会に送付し、条件にあった話者を選定してもらい、話者自身が用いる方言形を記述回答してもらう方法である。話者の条件は、次のように設定されている。

- (2) a その市町村に生育し、成人してからもほとんど他の市町村に出たことのない人
- b 方言をよく残していると思われる人
- c 男性(無理な場合は女性も可)
- d 高年層で、できれば70歳以上の人。伝統的な方言を知りたいので、回答可能なかぎり高齢の人。

調査当時70歳以上ということは、1932年以前生まれの人を対象としたということである。多くの回答は、70歳代の方からえられているものであるが、実際には50歳代から80歳代の間の方からの回答がえられているという。したがって、本稿で用いる方言語彙は、1952年以前生まれの方の回答ということになる。

調査項目は全体で340項目あり、〈蚕〉はそのうちの一つである。「第3調査票」の6番目に設定された項目で、調査文は次のとおりである。

6、右の絵をごらんください。絹糸をとるために飼うガの幼虫です。クワの葉を食べてマコを作ります。この虫を何と言いますか。

[参考] オボコ、カウコ、クワコ、ケゴジヨ、コ、コガイ、コゴジヨ、コナ、シロサマ、ヒメ、ヒムシ、ポーシ、ポボ、マムシ、ムシ



調査文は、なぞなぞ式の質問となっている。絵が付され、回答の際の参考語形が示されている調査文である。しかし、調査結果をみると、調査文でたずねている〈蚕〉の絵の下に、〈蚕の蛹〉が付されているため、回答にはその影響が出ているように見受けられる。語形以外の特記事項や回答の仕方によって、確実に〈蚕の蛹〉に対する名称を回答していると判断される場合には、それらを排除することとした^(註3)。

調査地点は、調査当時全国に約3200市町村あった中から、2000市町村を選定して調査票を送っている。その中で、〈蚕〉については、991地点からの回答をえられている。

本稿では、以上の手続きを経てえられた方言語彙を対象に、次の目的にしたがって考察を行う。

- (3) a 大正期から昭和期の日本語方言における〈蚕〉を表す語の造語法を明らかにする。
b 造語法の観点から〈蚕〉の方言分布の実態を明らかにする。
c 『物類称呼』以降の〈蚕〉を表す語形の経年比較を行う。

(3a) では、各方言形の造語成分を明らかにし、そこにみられる造語の発想法を考察する。(3b) では、(3a) の結果をもとにして語形に記号を与え、方言分布地図を作成する。さらに、その分布の実態について考察する。(3c) では、〈蚕〉を表す語の先行研究を用いて経年比較を行い、そこにみられる共通性と差異性を明らかにする。新井小枝子(2014)でも述べたように、性質の違う方言資料を使って経年変化をとらえようとした場合、資料を横断的に使用することの可否、あるいは、妥当性を検証する必要性はつねにつきまとう。しかし、本研究を、先学がすすめてきたこれまでの調査、研究に続くものとするためにも、慎重を期して考察をすすめていきたい。

II 日本全国における〈蚕〉を表す語形を記述した方言資料

日本全国の〈蚕〉を表す方言語彙について調査、記述を行ったものは数多く存在する。本稿であつかう東北大学方言研究センター資料も含めて、発表年代順にあげれば次のようなものがある。

- (4) a 柳田國男(1931)「音訛事象の考察」『方言』1、「音訛事象の考察(二)」『方言』2「音訛事象の考察(三)」『方言』3 春陽堂(後に『西は何方』(1948) 甲文社)
b 東條操編(1951)『全国方言辞典』東京堂出版
c 東條操編(1954)『標準語引き 分類方言辞典』東京堂出版
d 小学館(1989)『日本方言大辞典』尚学図書
e 平山輝男編(1992)『現代日本語方言大辞典』第2巻 明治書院
f 東北大学方言研究センター(2001)「消えゆく日本語方言の記録調査」資料(未公開)
小林隆 篠崎晃一(2003)『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』
g 佐藤亮一監修(2004)『標準語引き 日本方言大辞典』小学館
h 国立国語研究所(2016)「方言の形成過程解明のための全国方言分布調査」(FPJD) プロジェクトリーダー大西拓一郎
「全国方言分布調査(FPJD)」http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html ^(註4)

新井は、これらの方言資料のうち下線を引いた(4a)(4e)(4h)を用いて、〈蚕〉を表す語の方言分布について考察を行ってきた^(註5)。この3つの方言資料は、それぞれの調査時(公開直前)

の共時態としてとらえることができるものであり、かつ、全国を網羅した方言分布の実態を把握することができるものである。単純に年数の隔たりをみると、(4a)と(4e)では61年間、(4e)と(4h)では24年間の差がある。

本稿では、日本全国の方言語彙が収集されているものの、いまだ地図化にいたっていない(4f)を用いて、〈蚕〉を表す語の方言分布を考察することになる。それにあたり、(4a)(4e)(4h)(4f)について、方言資料の属性をまとめると表1のようになる。おのおのの方言資料の調査目的は、全国方言にみられる語形の多様性をとらえるという点では一致しているものの、当然のことながら、調査方法、記述方法、および公開の方法も個別的である。

(4a)は、新井小枝子(2012)で述べたように、北陸、東海より東の各地域で用いられる語形を中心に記述されているものである。西日本では、わずか京都、三重、島根、鹿児島、長崎で用いられる語形が採録されるのみである。調査の時期は明らかとなっていないが、この資料の発表年から推定すると、江戸後期から明治期生まれの当時の老年層が使用した語形であると考えられる。同様に、調査方法についても同資料の中で明示されていないので不明としているが、柳田國男(1931a)には次のようにある。

- (5) 私の採集には文書を経由したものが多い。もう一度個々の関係者に、検閲をして貰ふ必要が大いにある。それ故に努めて個々の単語の使用地域を明示し、なるべく其誤謬を発見しやすいようにした。

このことから、(4a)に記述されている語形も通信調査によって収集された可能性の高いこと

表1 〈蚕〉の方言分布地図のための調査資料

調査実施者 調査概要	4a 柳田國男 (1931)	4e 平山輝男 (1992)	4f東北大学方言研究 センター(2001)	4h全国方言分布調査 (2016)
調査時期	不明	1974 S49~1988 S63	2001 H13	2010~2015
調査方法	通信調査か	面接調査	通信調査	面接調査
調査票	不明	統一調査票 方言基礎 語彙調査項目+第二次 調査項目 約2300項目	統一調査票	統一調査票
質問文	不明	分野2動物 105かいこ(蚕)	統一質問文	統一質問文
※1調査地点	不明	72地点	2000地点に発送内1047地 点を回収	554地点
話者	不明	1893 M26~1959 S34生まれ、調査時81 歳~15歳	※2 1932 S7年以前生まれ、 調査時70歳以上、男性	原則として1940 S15年以 前生まれ、調査時 原則と して70歳以上

※1 それぞれの方言資料における調査概要に記されている地点数。「不明」とは、当該語形の使用地域は示されているものの、調査した地点数を数えることが不可能であることを示す。

※2 実際には50歳代の方、すなわち1952 S27年以前生まれの方の回答も含まれている。

が推察される。さらに、そのような調査方法によっていることの調査不足を、柳田自身が明確に認識していることがわかる。ただし、調査不足が指摘されることが有ったか無かったか、有った場合には修正がどのように行われてきたかについては、現在のところ追跡することがむずかしい。

(4e)の平山輝男編(1992ab)は、標準語引きの方言辞典である。この方言辞典では、原則として各都道府県に1地点の調査地点を設けて調査が実施されており、全体で72地点の調査結果が記述されている。新井小枝子(2010)では、この調査結果をもとにして全国の方言分布を考察した。調査地点は少ないものの、全国を網羅しているため、方言分布のおおよそを把握することができた。「かいこ(蚕)」の項目は、「分野2 動物」において調査が行われている。平山編(1992a)によれば、つぎのような調査文と注意事項によって、調査が行われた。

(6) かいこを飼う。※養蚕との関係、成長の過程による名称の変化に注意。

この調査文に基づき、各地点を担当する調査員が、話者と面接することによって得た方言語彙である。平山編(1992b)「かいこ」の項目に、調査地72地点の結果が記述され、かつ、方言分布地図も作成されている^(註6)。新井(2010、2012)では、平山編(1992b)に採録されている各調査地点の語形をもとにして、あらためて方言分布地図を作成して考察を行った。

(4h)は、〈蚕〉を表す語について全国を調査したもっとも新しい資料である。つぎの質問文によって、全国で統一的に調査が行われた。

(7) 質問番号L-06(絵) これは何と言いますか。成長すると白っぽい色の糸をはいて繭を作ります。その繭から糸をとって、絹を織ります。



図1 絵カード〈蚕〉

図1に示した絵を提示して、それをどのように呼ぶかをたずねる形式の質問である。各調査地点に担当の調査員がおもむき、面接によって調査を行っている。この質問文における調査のねらいは、次のとおりである。

(8) 語の分布を、養蚕業の実態（繭の生産量、飼育量、桑園面積）と重ね合わせることに
より、お互いの関係性を把握する。過去の取扱い地図集は18あり、方言辞典での立項も
多い。それらと比較をして分布変化の様子を把握する。

〈蚕〉を表す語の全国分布を、養蚕業の実態と対照して解釈すること、および、経年変化を考
察することを目指して設定された項目である。

Ⅲ 〈蚕〉を表す語の造語成分

(1) 造語成分コの有無

〈蚕〉を表す語のもっとも古い形式はコである。文献資料にみられる中央語では、コ（甲類）
という1音節の語で表されている。一方、現代日本語における共通語の形式はカイコである。カ
イコは、『万葉集』にみられる形式「飼ふコ」から生じたものと考えられる。上代においては、
カイコの形式が生じていたかどうか判断に迷うところではあるが、『本草和名』『新撰字鏡』『倭
名類聚抄』の記述には「加比古」とあるので、中古には確実にカイコが用いられていたことが明
らかとなっている^(註7)。

さて、(4f) 東北大学方言研究センター資料における〈蚕〉を表す語には、造語成分にコを含
む語と、含まない語がある。表2に示すように、前者は31種類、後者は18種類に統合できる。コ
は単独で用いられるばかりではなく、さまざまな形式の合成語の一部となり、〈蚕〉を表す造語
成分として機能している。造語成分としてコをもつかもたないかに注目し、それぞれの語の分布
を示したものが図2である。造語成分にコをもつ語を用いる地域が圧倒的に多く、コをもたない
語は各地域に点在しているのみである。上代から用いられてきた〈蚕〉を表す1音節語コは、さ
まざまな合成語の一部として生きているということが確認できる。

(2) 造語成分コをもつ語

表2にみるように、(4f) 東北大学方言研究センター資料において、コをもつ合成語は31種類
に統合することができる。これをみると、上代から用いられてきた1音節語コも、いまだ単独で、
語として用いられている地域があることがわかる。その一方、コの前後に別の造語成分を付し、
新たな合成語をつくり出している様子も確認することができる。

敬意あるいは親愛の意味合いをこめた造語成分（以下、敬意の造語成分）に注目し、その有無
によって分類する。表2の縦軸にそれを示している。

敬意の造語成分をもたない語には、明確にわかるものでもカイコ（飼う+コ）、ケゴ（飼う+コ）、
コガイ（コ+飼う）、カイコムシ（飼う+コ+虫）、ケゴムシ（飼う+コ+虫）、マユコ（繭+コ）、
クワコ（桑+コ）、クワコムシ（桑+コ+虫）がある。ボコ（一+こ）、ヤゴ（一+コ）、ヌハカ

イコ（－＋飼う＋コ）、ムカアゴ（－＋コ）は、コを有するものの、造語成分を明確に判定することがむずかしい。造語成分の判定ができる語については、〈蚕〉を表すコに、「かう（飼う）」「くわ（桑）」「まゆ（繭）」「むし（虫）」の造語成分を付して合成語をつくり出している。コは古く、〈蚕〉ばかりではなく〈子ども〉〈粉〉〈籠〉〈海鼠〉を表していた。それらとの同音衝突を避け、かつ、1音節語の不安定さを回避し、合成語をつくり出したものと考えられる。その際に、〈蚕〉のもつ属性に注目した造語成分、すなわち、人間が「飼う」生き物であること、「桑」を食べて成長する生き物であること、「繭」をつくる生き物であること、「虫」の一種であることに注目して、造語成分が選択されているといえる。

一方、敬意の造語成分をもつ語がある。その造語成分が他の造語成分に付される場合のあり方に注目すると、つぎの二つに分類することができる。

表2 〈蚕〉を表す語の造語成分

敬意の造語成分	コ	コをもつ語：31種類	コをもたない語：18種類
無	コ	こ	ムシ 虫
	カイコ	飼う＋こ	イモムシ 芋虫
	ケゴ	飼う＋こ	アオムシ 青虫
	コガイ	こ＋飼う	マユ 繭
	カイコムシ	飼う＋こ＋虫	ヤママユ 山繭
	ケゴムシ	飼う＋こ＋虫	ヤママユガ 山繭蛾
	マユコ	繭＋こ	クワ 桑
	クワコ	桑＋こ	ムシグワ 虫桑
	クワコムシ	桑＋こ＋虫	
		ボコ ー＋こ	アズキデロ ー
		ヤゴ ー＋こ	ツチブウ ー
		ヌハカイコ ー＋飼う＋こ	サトウマ ー
		ムカアゴ ー＋こ	
有		オコ 御＋こ	オシロ 御＋白
		オココ 御＋こ＋こ	シロサマ 白＋様
		トドコ 尊い＋こ	オシラサマ 御＋白＋様
		ヒメッコ 姫＋こ	ノンノウ ー
		オコサマ 御＋こ＋様	ノンノウサマ ー＋様
		トドコサマ 尊い＋こ＋様	オシャレサン 御＋洒落＋さん
		ヒメッコサン 姫＋こ＋様	アドド 嗚呼尊
		オボコ 御＋ ー ＋こ	
		オカイコ 御＋飼う＋こ	
		カイコサマ 飼う＋こ＋様	
		カイコメ 飼う＋こ＋め	
		ケゴジョ 飼う＋こ＋じょ	
		ケゴドン 飼う＋こ＋どん	
		オカイコサマ 御＋飼う＋こ＋様	
		オコサマカイコ 御＋こ＋様＋飼う＋こ	
		コガイサマ こ＋飼う＋様	
		ボコサマ ー＋こ＋様	
		オボコサマ 御＋ー＋こ＋様	

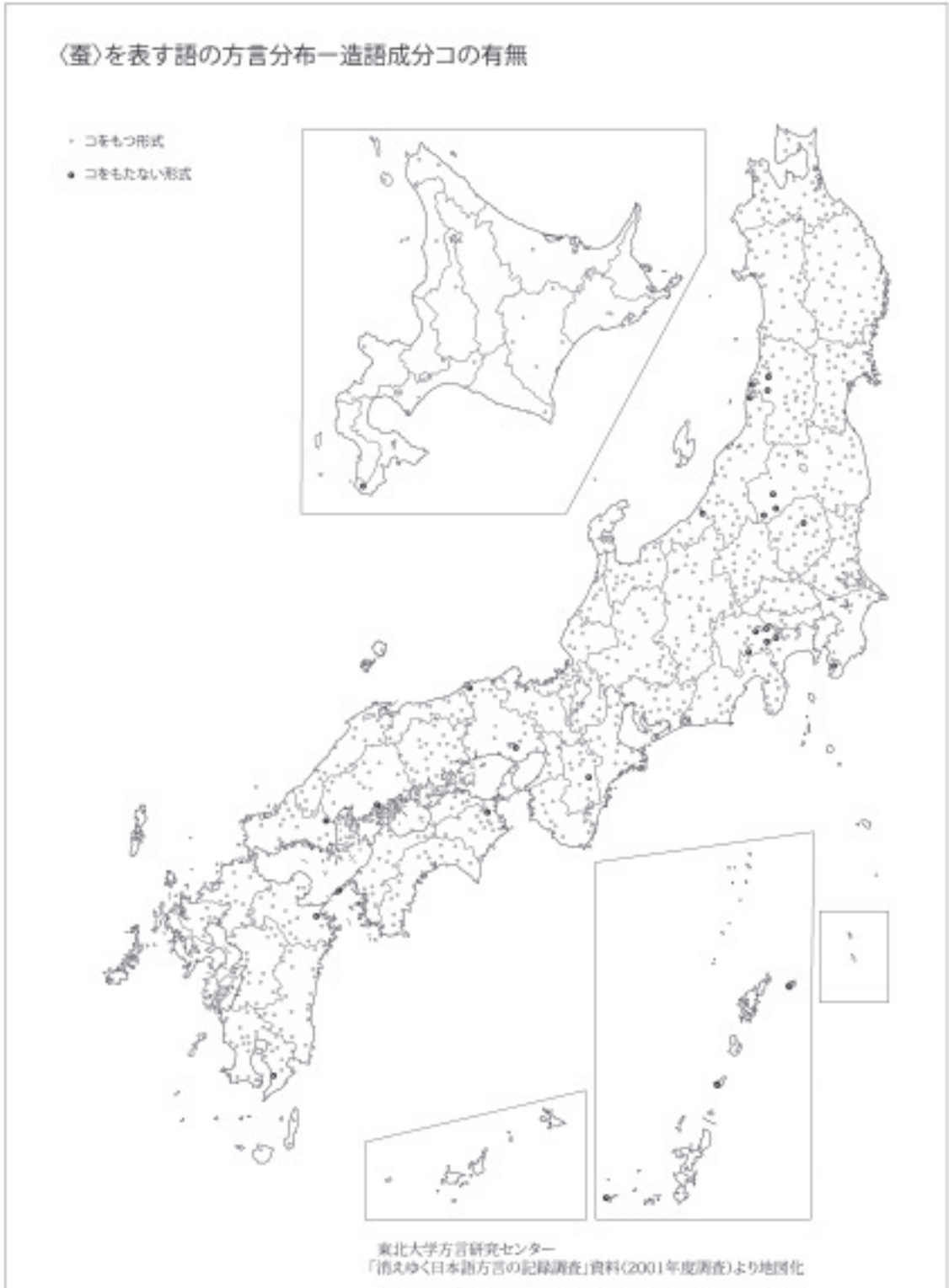


図2 〈蚕〉を表す語の方言分布「コをもつ語形とコをもたない語形」

- (9) a コに直接敬意の造語成分を付す語
 b コを含む合成語にあらためて敬意の造語成分を付す語

(9a) はオコ (御+こ)、オココ (御+こ+こ)、トドコ (尊い+こ)、ヒメッコ (姫+こ)、オコサマ (御+こ+様)、トドコサマ (尊い+こ+様)、ヒメッコサン (姫+こ+さん) である。「御」「尊い」「姫」「様、さん」は、それぞれ敬意あるいは親愛の意味合いをこめた造語成分である。

(9b) にはオボコ (御+-+こ)、カイコサン (飼う+こ+さん)、カイコメ (飼う+こ+め)、ケゴジョ (飼う+こ+じょ)、ケゴドン (飼う+こ+どん)、オカイコサマ (御+飼う+こ+様)、オコサマカイコ (御+こ+様+飼う+こ)、コガイサマ (こ+飼う+様)、ボコサマ (-+こ+様、オボコサマ (御+-+こ+様)) がある。(9a) と同様に、接頭辞「御」、接尾辞「様、さん」「め」「じょ」「どん」によって、敬意あるいは親愛の意味合いをこめる。

(9a) と (9b) の造語法を比べると、〈蚕〉を表す語形に敬意をこめる、親愛をこめるという発想は共通しているものの、相対的に (9a) の方がつくりが単純であり、(9b) の方が一段階複雑なつくりになっているといえる。

(3) 造語成分コをもたない語

表2に示したように、〈蚕〉を表す語にコをもたない形式は18種類に統合することができた。そのうち、敬意の造語成分をもたない形式は11種類、もつ形式は7種類である。

敬意の造語成分をもたない語では、ムシ (虫)、マユ (繭)、クワ (桑)、ガ (蛾) という形式によって造語されたものがみられる。現実の世界で〈蚕〉と隣接関係にある〈もの〉の名が、造語成分に選択されている。そのほか、各1地点での使用が確認できるアズキデロ、ツチブウ、サトウマがある。この3語は、造語成分の認定がむずかしい。これについては、それぞれの語形の使用地域において、〈蚕〉の名称についての記述的な調査を行い、造語成分の解釈につとめていく必要がある。

敬意の意味合いをこめた造語成分をもつ語では、複数地点で確認できるオシロ (御+白)、シロサマ (白+様)、オシラサマ (御+白+様)、アドド (嗚呼尊) と、各1地点で確認できるノンノウ、ノンノウサマ (-+様)、オシャレサン (御+洒落+さん) がある。オシロ、シロサマ、オシラサマは、蚕神の信仰と関係のある語とみていいだろう。アドドは、『日本方言大辞典』にしたがえば「嗚呼尊」である。全国各地の方言では、〈蚕〉を表す語としてだけでなく、感動詞として「神仏を拝むときに唱える語」「感謝の気持ちを伝える語」に使用したり、「月」「太陽」「星」「雷」を表す語として使用したりする例がみられる。同様に、ノンノウも全国各地の方言で、「僧侶」「雷」「星」など敬いあるいは畏れの対象を表す語として使用される例がある。

IV 〈蚕〉を表す語の方言分布

(1) コ、カイコ、クワコの分布

これまでに何度も述べてきたように、文献にあらわれる最も古い語形は、『万葉集』にもあらわれるコである。文献では、それほど時をおかずして、カイコ、クワコの語形もあらわれる。これらのうち、カイコが現代日本語における共通語である。

図3の方言分布をみると、コは広島、徳島、愛媛、熊本、長崎に各1地点ずつ分布する。同様に、クワコは青森に3地点、秋田に2地点、宮城、千葉、三重、広島、山口、佐賀に各1地点ずつ分布する。いずれも分布域をもっているとは判断しにくく、かつての都から離れた地域に点在している。一方、カイコは全国に広い分布域をもち、現代日本語の共通語として通用していることがうかがえる。特に、西日本での分布は広がりがある。東日本では、他の語形の分布域の中に混在して分布しているように見える。つまり、西日本と東日本では、カイコの分布のありようが異なるということである。

西日本におけるカイコ以外では、カイコおよびそれが音声変化したケゴに、敬意の造語成分を付した語形が分布域をもつ。カイコとそれにもとづく語形が分布することから、カイコは西日本を中心に用いられてきた語形であると考えられる。

(2) 敬意の造語成分を付す語形の分布

図4は、Ⅲ(2)で述べた(9a)と(9b)の分布を示したものである。(9a)コに直接、敬意を表す造語成分を付す語形の分布と、(9b)コをもつ合成語に敬意を表す造語成分を付す語形の分布を示している。これをみると、(9a)の語が連続した広い分布域をもつのは、青森、岩手、山形、宮城と、茨城、栃木、群馬、埼玉、東京、神奈川である。西日本には、島根、宮崎に1地点ずつしか分布しない。その他の地域には、(9b)すなわちコをもつ合成語に敬意を表す造語成分をもつ語形と、敬意の造語成分をもたない語形が分布する。

IV(1)で述べたコ、クワコの分布と、(9a)の分布を重ね合わせると、コが最も古い形式であることを示す周囲分布をなしている。(9b)コを含む合成語に敬意の造語成分を付す語形は、それよりも新しいと考えられる。また、慎重に判断しなければならないことではあるが、〈蚕〉を表す語において、敬意の意味合いをもつ語形が古く、敬意の形式をもたない語形が新しいという仮説を立てることも可能であろう。

それぞれの語を構成する造語成分に注目しながら、その語の分布域を確認すると、東日本だけに広がりをもって分布する語形がある(図3)。まず、トドコは、「尊い+蚕」と解釈される語である。青森、岩手、秋田に連続した分布域をもつ。福島には1地点ある。この地域だけに分布する特徴的な語であるといえる。つぎに、オコサマは「御+蚕+様」である。〈蚕〉を表す語形の

〈蚕〉を表す語の方言分布



東北大学方言研究センター
「消えゆく日本語方言の記録調査」資料(2001年度調査)より地図化

図3 〈蚕〉を表す語の方言分布

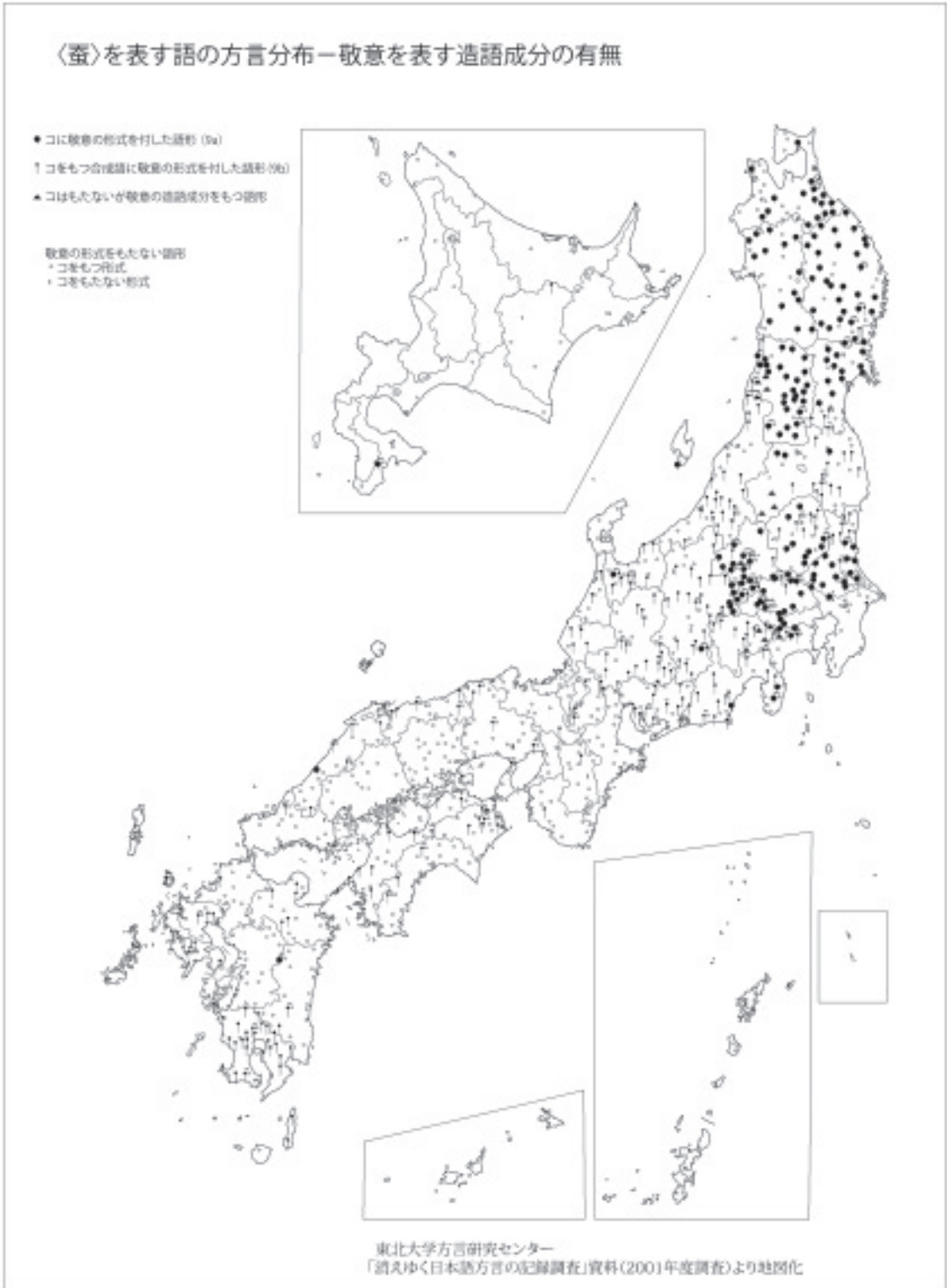


図4 〈蚕〉を表す語の方言分布「敬意を表す造語成分の有無」

最も古い形式の前後に、敬意の接辞を付した語である。岩手の南部から、宮城、山形、福島の一部にかけて、また、栃木、茨城、群馬、埼玉、東京、神奈川にかけて、それぞれ広がりをもった分布域をもつ。さらに、ボコサマ、オボコは「ぼこ」に、それぞれ「様」や「御」を付した語形である。新潟県に分布域をもつ。オボコサマは、「ぼこ」の前後に「御」と「様」をともに付す語形である。長野県の南部と山梨県に分布域をもつ。

一方、西日本を中心に広がりをもって分布する語を確認すると、東日本ほど種類は多くない。宮崎の南部と鹿児島に分布するケゴジョ、ケゴドンだけである。ケゴは「かいこ」の音声変化した語形である。『日本方言大辞典』の「音韻総覧」によれば、鹿児島県は [ai] が連母音融合して [e] に変化する地域である。「かいこ」の [kai] の部分が [ke] と変化し、ケゴ-となったものである。「じょ」および「どん」は、親愛や尊敬の意を表す接尾辞である。なお、ケゴジョは、富山と岩手にも1地点ずつみられるが、この分布の解釈は慎重に行うべきであろう。

敬意の造語成分をもつ語は周囲分布をなしており、東日本と西日本を比べると相対的に東日本の方が多様な語形を造語しているといえる。

(3) コをもたない語形の分布

造語成分コをもたない語は、点在、または、分布域をもつ語であってもその広がりはずまく、孤立した分布となっている(図3・図4)。

まず、アドドは福島に2地点みられる。ノンノウ、ノンノウサマは福島に1地点みられる。オシロ、シロサマ、オシラサマは、山形、山梨、神奈川にそれぞれ連続した分布がみられる。ノンノウやシロは、敬意を表す造語成分「お(御)」や「さま(様)」とも相性がよく、〈蚕〉のもつ神話性との関係がありそうな語形である。ごく限られた地域に分布する語形ではあるが、その地域は東日本に限られている。

つぎに、コをもたず〈蚕〉の隣接関係にある対象を表すムシ、マユ、クワによって造語される語形は、相対的には西日本の方に多く点在する。敬意を表す造語成分をもたない語形を用いる地域が広がっていることとも無関係ではなさそうである。

V 全国に分布する語形の経年比較

全国における〈蚕〉を表す語の形式の多様性については、古くは越谷吾山(1775)『諸国方言物類称呼』(以下、『物類称呼』)に次のように記述されている。

- (10) かいこ○東国にて・おこと云越後にて・うすまと云同国長岡にては・ぼこと云信濃にて・ぼろうと云奥州津軽にて大なるものを・とうどこと云小き物を・きんこと云出羽にて・とゝこと云房州にて・ひめこと云

おこ【東国】、うすま【越後】、ぼこ【越後国長岡】、ぼぼう【信濃】、とうどこ、きんこ【奥州津軽】、ととこ【出羽】、ひめこ【房州】という、8種類の語形を使用地域名とともに採録している。近世末期において、そこに記された地域で使用されていた語形だと解される。(4a-h)は、この『物類称呼』につづく方言資料である。表3は、『物類称呼』と(4a)(4e)(4f)(4h)を対照し、日本全国で用いられる形式を記述したものである。

江戸後期から明治期の語形が採録されていると考えられる(4a)の柳田(1931a)では、まず、つぎのように述べている。

- (11) 今日となつては、カヒコを唯一の標準日本語として、全国を悉く之に準ぜしめ得たのもあらうが、実際はたゞ此語でもよく通ずといふのみで、未だ所謂「耳の方言」の域を脱せず、「口の方言」としては別の語を使用する者が甚だ多いのである。さうして其地方語が大体に於て、依然として尚コであるのは、注意すべき現象と言はなければならぬ。

すなわち、カイコが全国に通用する共通語であること、コという1音節語が地方で広く使われる語であることを指摘している。当時の〈蚕〉を表す方言語彙の実態をとらえたものとして、この指摘は興味深い。図3では、コは西日本に数地点分布するのみで、「広く使われる語」と解釈することはできない。〈蚕〉を表す語形の最も古い語形コが衰退していく様子を示していると考えられよう。

その他に(4a)には、表3と表4に分けて示した27種類の形式が使用地域とともに採録されている。それぞれの資料を対照すると、各地域にあらわれる語形にちがいがみられる。『物類称呼』に採録のある語について整理したものが表3である。(4e)の資料は、調査地点が全国72地点と少ないことから、採録されている語形の種類が少ないことに影響していると考えられる。そのため、経年比較をするのに十分な語形が採録されていないと判断し、本節の考察から除外することとする。

表3 全国に分布する〈蚕〉を表す語の形式①

代表語形	物類称呼	4a 柳田國男	4e 平山輝男	4f 東北大学	4h FPJD
かいこ	(○)	(○)	○	○	○
とどこ	○	○	○	○	○
おこ	○	○		○	
ぼこ	○	○		○	
ひめこ	○	○		○	
ぼぼう	○	○			
きんこ	○				
うすま	○				

*空欄は、当該資料にその語形の採録がないことを示す。

表4 全国に分布する〈蚕〉を表す語の形式②

代表語形	物類称呼	4a 柳田國男	4e 平山輝男	4f 東北大学	4h FPJD
おこさま		○	○	○	○
かいこさま		○	○	○	○
おかいこさま		○	○	○	○
ぼこさま		○	○	○	○
おぼこさま		○	○	○	○
けごじょ		○	○	○	○
けご		○		○	○
こがい		○		○	○
こどのさま		○			○
こがいさま		○	○	○	
おこどの		○			
こどの		○			
こごじょ		○			
こごせ		○			
あとっさま		○			
ぼぼーさま		○			
おじよろさま		○			
おさなもの		○			
おしなもんさま		○			
ひめっこさん		○		○	
こ		(○)		○	
おかいこ			○	○	○
こなさま			○		○
まんむし			○		
のんのうさま				○	○
むし				○	○
かいこむし				○	○
くわ				○	○
おここ				○	
おぼこ				○	
かいこめ				○	
けごどん				○	
おこさまかいこ				○	
とどこさま				○	
しろさま				○	
おしらさま				○	
おしやれさん				○	
あどど				○	
まゆこ				○	
くわこ				○	
けごむし				○	
くわこむし				○	
おしろ				○	
のんのう				○	
いもむし				○	
あおむし				○	
まゆ				○	
むしぐわ				○	
ぐいこ					○
くわむし					○
かねのむし					○
むしじゃ					○
むしぐわー					○
げんだが					○

*空欄は、当該資料にその語形の採録がないことを示す。

『物類称呼』にはみられて(4a)(4f)(4h)にみられない形式は、キンコとウスマである。同様に、(4f)(4h)にみられない形式は、ボボウである。(4h)にみられない形式はオコ、ボコ、ヒメコである。逆に、『物類称呼』以降、(4a)(4f)(4h)のすべてにみられる語形はカイコ、トドコである。本節で比較の対象から除外した(4e)にも採録がある。この実態をどのように解釈するかは判断に迷うところではあるが、調査年代を追うごとに消滅していった語形と、安定して使用されている語形とがありそうではある。少なくとも、文献で中古からの使用が認められるカイコは、現代日本語では全国の共通語形式として定着しており、安定感があるということだけは指摘できそうである。トドコは文献では確認できない語形ではあるものの、青森、岩手、山形に広い分布域をもつ語形として安定しているといえそうである。各資料において、使用がないように見えている語形については、消滅か、採録されなかったかの間で判断に迷う。

表4は、『物類称呼』には採録がなく、(4a)(4e)(4f)(4h)にみられる語形を整理したものである。(4a)以降、(4e)を除くすべての資料にみられる語形は、オコサマ、カイコサマ、オカイコサマ、ボコサマ、オボコサマ、ケゴジョと、ケゴ、コガイである。また、(4f)と(4h)ではムシやムシを造語成分に用いる合成語が増える。まず、カイコムシ、ケゴムシ、クワコムシ、ムシグワ、クワムシ、ムシグワーという、造語成分に「こ」「くわ」をもつ語がそれぞれである。さらには、ムシ、イモムシ、アオムシ、カネノムシ、ムシジャのようにな、〈蚕〉を含む上位語、あるいは〈蚕〉と類似した虫を表す語もみられる。青森に分布するゲンダガは〈虫〉を表す方言形である。養蚕の衰退している現在、〈蚕〉はもはや人間にとって特別な存在ではなくなり、〈虫〉の範疇に取り込まれていく傾向が見てとれる。

VI 東北大学方言研究センター資料とFPJDの比較

表1にまとめたように、〈蚕〉を表す語の方言分布を詳細にとらえることのできる資料は(4f)東北大学方言研究センター資料と(4h)FPJDである。いずれも500を越える地点数を調査しており、話者もほぼ同年代の方が調査の対象となっている。大きくちがうのは、調査法である。FPJDは統一調査票と絵カードに基づく面接調査、東北大学方言研究センター資料は統一の質問紙を郵送にて送付、回収するというアンケート調査である。また、調査地点も完全に一致しているわけではない。したがって、両者の方言分布を比較し、差があらわれたとしても、経年変化を論ずることには慎重にならざるをえない。ここでは、あらわれる語形の共通性と差異性を指摘したい。

FPJDを用い、東北大学方言研究センター資料と同様の方法で語形を統合して地図化したものが図5である。両者にあらわれる語形の種類は、表3と表4で確認したように東北大学方言研究センター資料が41種類、FPJDが23種類である。また、両者に共通してあらわれる語形は15種類ある。これらは、ひとまず、安定して用いられている語形であると言えそうである。東北大学研

〈蚕〉を表す語の方言分布 (FPJD)

- カイコ
- ケゴ
- グイコ
- コガイ

- オカイコ
- ▲ トドコ

- ボコサマ
- ▲ コドノサマ
- コナサマ
- カイコサマ
- ケゴジョ
- ノンノウサマ

- ▲ オコサマ
- オカイコサマ
- オボコサン

- | ムシ
- | カイコムシ
- | クワムシ
- マ カネノムシ

- クワ
- ムシジャ
- ムシグワ

- ゲンダガ

- その他 (サナキ、ジサンバ、クマサン)
- 無回答



図5 FPJDによる〈蚕〉を表す語の方言分布

究センター資料のみにあらわれる語形は27種類、FPJDのみにあらわれる語形は8種類ある。これらは、消滅していく可能性の高い語形、新しく造語された可能性のある語形、偶然採録されなかった可能性のある語形であると考えられるが、それらを判断するには、使用が確認される該当地域での詳細な記述調査が必要である。

分布の実態を比べてみると、当然のことながら語形とその分布域には共通性がみられる。青森、岩手、秋田のトドコ、新潟のボコサマ、鹿児島のカゴジョ、島根、鳥取のカイコサマ、群馬、山梨、愛知のオコサマ、オカイコサマ、オボコサンについては、分布域が変化していない。

一方、差異性もみられる。青森のゲンダガはFPJDにはじめてみられる語形である。また、共通語形式カイコの分布域が広がっているように見える。全国的に、〈蚕〉を特別な虫とみるものがなくなっていく傾向にあるといえる。

Ⅶ まとめと課題

〈蚕〉は『日本書紀』や『古事記』にその誕生譚が描かれるように、古くから五穀とともに、人間の日常生活に欠かせない存在としてあつかわれてきた。近世以降、家畜化された昆虫として認識され、特に明治期以降は日本全国で人びとの飼育の対象となってきた。長い歴史の中で、数多く存在する昆虫の中でも特別な存在であり続けてきた。しかし、近年では、養蚕業の衰退とともに、〈蚕〉は生活の中から姿を消しつつある。

本稿では、東北大学方言研究センター資料を中心に、〈蚕〉を表す語の造語成分を明らかにし、方言分布の実態を考察した。

各地域で用いられている語を、コの有無、敬意の造語成分の有無によって統合し、造語発想法を明らかにした。〈蚕〉という小さな昆虫が、長い歴史の中で敬意の対象としてあつかわれてきたということが反映されている。

明らかとなった造語成分にしたがい、統合した語形に記号を与えて作成した方言分布地図によって、詳細な分布の実態が明らかとなった。まずは、上代の文献にみられる1音節語コは西日本の数地点に分布することがわかった。つぎに、そのコに、直接、敬意の造語成分を付す語形は東日本で多様な種類が造語されており、各語形が広がりのある分布域をもっていることがわかった。共通語形式のカイコは、西日本一帯に広がりのある分布をしており、東日本では敬意の造語成分を付す語の分布の中に混在して分布することを指摘した。さらに、コをもたない形式であっても、敬意の意味合いをもつ造語成分によって造語がなされるのは、東日本の特定の地域に限定されることも指摘した。

このような分布の背景に何が関与しているのかについては、あらためて考察する必要がある。詳細な方言分布の実態が明らかになった今、これまでも仮説をたてて論じてきた養蚕の歴史、桑園面積の実態と重ね合わせることは最低限必要なことである。また、各地域の〈蚕〉を表す語

の記述調査、および、本稿では除外した方言資料の中から、柳田（1931bc）以降盛んに指摘されてきた〈蚕の蛹〉を表す語についての記述調査を行い、記述的研究を積み重ねる必要もある。さらにそれに基づく対照研究を行い、方言分布地図では解釈しきれない領域に踏み込んでみたい。

（あらい さえこ・群馬県立女子大学文学部准教授／高崎経済大学地域政策学部非常勤講師）

註

- 1 新井小枝子（2010、2012）において、具体例を挙げて考察を行った。
- 2 詳細については、小林隆、篠崎晃一（2003）および東北大学方言研究センター HP (http://www.sal.tohoku.ac.jp/hougen/k_kinkyu.html 2016年10月検索) を参照されたい。
- 3 山形県マイミ（繭身）、愛知県ドッチ、岐阜県ムツゴ、愛媛県・熊本県カイコサナギなど。
- 4 新井は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」（プロジェクトリーダー 大西拓一郎、2010～2016）に共同研究者として参加した。
- 5 (4a) は新井小枝子（2012）、(4e) は新井小枝子（2010）、(4h) は大西拓一郎編（2016）によって方言分布地図を作成した。なお、(4h) の方言資料を用いた大西編（2016）では、〈蚕〉の方言分布地図を新井が担当した。
- 6 平山輝男編（1992b）1038ページ、図79。
- 7 新井小枝子（2010）第2章によって論じた。

参考文献および引用文献

- 新井小枝子（2010）『養蚕語彙の文化言語学的研究』ひつじ書房
新井小枝子（2012）『絹のことば』上毛新聞社
新井小枝子（2014）「伊藤信吉方言資料にみる〈桑の実〉の方言分布—多様な方言資料を横断的に利用した方言研究のために—」『国文学研究』34号 群馬県立女子大学国語国文学会
大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』朝倉書店
小林隆、篠崎晃一（2003）『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』文部科学省科学研究費成果報告書
平山輝男編（1992a）『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院
平山輝男編（1992b）『現代日本語方言大辞典 第2巻』明治書院
柳田國男（1931a）「音訛事象の考察」『方言』1 春陽堂
（後に『西は何方』（1948）甲文社に収録されたものである。本稿では『定本柳田國男集 第19巻』（1981）筑摩書房 によった。本稿への引用部分については旧字体を新字体に改めた。）
柳田國男（1931b）「音訛事象の考察（二）」『方言』2 春陽堂
柳田國男（1931c）「音訛事象の考察（三）」『方言』3 春陽堂
鴨長明（1212）『方丈記』本稿では西尾實（1957）日本古典文学大系30『方丈記 徒然草』岩波書店によった。
越谷吾山（1775）『諸国方言物類称呼』本稿では『諸国方言物類称呼 本文・釋文・索引』（1973）京都大学文学部国語学国文学研究室編によった。
『日本方言大辞典』（1989）小学館

付記

- 1 東北大学方言研究センター資料の使用については、小林隆先生（東北大学教授）のご配慮をたまわった。地図化にあたっては、Adobe社のIllustratorCS5を用い、国立国語研究所のプログラムであるプラグインを利用した。地図化の基本図となる調査地点地図の作成をはじめ、地図化の過程においては、竹田晃子さん（フェリス学院大学非常勤講師）、澤村美幸さん（和歌山大学准教授）のご協力とご助言を得た。
- 2 FPJD（Field Research Project to Analyze the Formation Process of Japanese Dialects）として用いた方言資料は、国立国語研究所の共同研究「方言の形成過程解明のための全国方言分布調査」（研究代表 大西拓一郎）の成果に基づくものである。

謝辞

千葉貢先生の御退職にあたり謹んで感謝の意を表します。先生との出会いは、私が広島大学での研究生生活を修了し、群馬に戻った時期だったと記憶している。21世紀を間近にひかえた頃だったろうか。その研究生時代、自ら定めた方針に則って、生まれて初めて〈桑の実〉の方言分布地図をつくった。その地図について発表した折、上毛新聞からの取材を受けた。記事になった私の養蚕語彙研究についてご覧になった先生は、当時勤務していた非常勤先の短大まで照会し、私をたずねてくださった。そして、当時、高崎経済大学が主体となって行っていた共同研究に誘ってくださった。それ以来、長きにわたって多くの教えを受けながら、今日まで歩んできた。先生の御退職にあたり、出会いのきっかけとなった養蚕語彙、すなわち〈蚕〉を表す語の方言分布について、拙いながらも考察を一步前に進められたことをうれしく思う。先生、長きにわたってありがとうございました。心より感謝申し上げますとともに、先生のご健康とご活躍をお祈りいたします。